HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道の農村における青年層の価値観形成の要因
Author(s)	原田, 淳; HARADA, Jun
Citation	北海道大学農經論叢, 48, 159-179
Issue Date	1992-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/11066
Type	departmental bulletin paper
File Information	48_p159-179.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道の農村における青年層の価値観形成の要因

原田　　淳

目　次

1．はじめに……159
2．寒冷地畑作農村の青年の行動……162
　1）日常的生活行動 ― 生活時間調査の分析 ……162
　2）地域的活動への参加形態……163
3．農村における青年の意識……166
　1）農業経営主の農業・農村観……166
　2）農村における青年の職業観・生活環境観……169
4．社会環境と青年の意識……173
　1）職業選択と職業観……173
　2）居住地の選択と意識……175
5．結論……177

1．はじめに

農業経営研究の動向として，これまで要素論・組織論をめぐる議論が主流といえる位置にあったが，近年，管理論に関わる議論がその位置を高めている。現実に照らしたときに，従来の組織論の手法が手詰まり状態にたち至ったという側面もあるが，組織論的な論議の一定の進捗によって，組織を編成する主体の機能を扱う管理論的分野の重要性がいっそう認識されるようになったことも無視できない[1)]。つまり，農業経営研究全体にとっても，管理論的分野，とりわけそれを制御する主体にかかわる研究の進展がよりいっそう重要になってきていると考えられる。

経営者の意志決定を扱う管理論的分野の中でも，経営者の能力や資質に関

1）経営組織論を中心とする農業経営学の流れと，その中での主体の取扱いに関しては大泉一貫『農業経営の組織と管理』，農林統計協会，1989年，に詳しい整理がなされている。

する議論が脚光を浴びてきている。つまり，要素論・組織論の成果だけでは意志決定に関わる問題を解ききれないなかで，経営の第4の要素としての経営者の資質といったものが注目され始めたといえる。このように経営者の資質に注目するといったとき，とくにその形成・育成といった側面が主に取り上げられてきた。これまで「農業生産はあっても農業経営はない」あるいは「農家は企業者ではなく単なる業主である」といわれてきたが，企業的農業経営とその経営主体の育成・確立の方策が模索されてきたことが，その背景となっていると考えられる[2)]。そこでの資質というものは，経営者の具備する能力や機能が研究の対象となり，このような能力や機能が，経営の要素や組織と密接な結びつきをもつと考えられているのである。

しかしながら，農業経営者が具備すべき性格という課題については，そのような経営の運営と直接に結び付くという経営者の資質や機能という局面ばかりでなく，それがいかに形成されてきたか，あるいはそれがどのような環境条件において育まれてきたか，さらには後継者の減少傾向が強まる中では，経営者の資質として求められるものが変化してきているばかりでなく，担い手をいかに確保していくかが切実な問題となってきており，要素論や組織論との結びつき以前の問題として，近代的な農業経営者としてあるいは地域農業を担うにふさわしい能力をもつ人間の輩出といった，より根本的な部分への解明が必要となる[3)]。

要素論・組織論を中心としてきた従来からの農業経営研究においても，農業経営者がもつ性格さらには農業後継者の存在の有無が，いまや農業経営あるいは地域農業存立に対し大きな影響をあたえるものであるならば，このような基本的な側面における研究，すなわちその農業経営者が具備すべき性格あるいはそのようなものが輩出する諸条件のメカニズムを明らかにすることは，大きな意味を持つ。例えば，経営者のキャラクターを与件として扱うのではなく，そうしたキャラクターがどのように形成されるのかの問題領域に

2）田口三樹夫「農業経営者の思考と行動 ― 転換期の農業経営者論 ―」児玉賀典編『農業経営管理論』，地球社，1980年，および武籐和夫「経営管理的意思決定の方法」児玉賀典編『農業経営管理論』，地球社，1980年，などを参照のこと

3）このような経営主の人格的側面を対象とした研究には天間　征「農業の経営者能力に関する研究」『農業経済研究』第43巻第1号，日本農業経済学会，1971年，などがある。

まで農業経営研究においても迫るべきであると考えるのである。

以上のような問題意識の下で本稿では，さしあたって農村青年層の農業・農村に対する価値観形成のありかたにかかわって，とりあえず日常的な生活時間と地域行事への参加状況，つまり日常における行動の「静」と「動」を性別・年代別に分析し，農村青年層の行動における特徴についての把握を試みる。次に，農業という職業に対する意識および農村という生活環境に対する意識を，農家と非農家間，条件の違う農村間，農村と都市間の比較を通じて分析し，そのような価値観形成の要因ならびに環境条件の重要性について言及したい。専業的農家が大半である北海道の農村における若者は，必然的に農業という場面と密接に関連して存在しており，したがってその行動は自分の農業への価値観いかんによって決定される部分が大きいと考えられる。そしてその価値観は，若者にとって最も身近な，例えば親の人生観・農業観のあり方，さらには地域における人的組織化状況などから，大きな影響を受けるものと考えられる。本稿では，そのような環境条件のあり方を中心として分析を試みる。

研究対象地域として純農村地帯である十勝管内中札内村を中心的に取り上げた。中札内村は，昭和59年に農業機械銀行を中核とする地域農業システムで朝日農業章を授賞するなど，農業面での取り組みは全国的にも注目を集めている。この村のユニークな点は，こうした地域農業システムの形成過程において，昭和30年代に始まった全国的にも希な全村法人化運動を契機として，旧来の農事実行組合を単位とする農村から，個々の農家や個人を単位とする新しい農村づくりが行われてきたことである。農協運営は個人参加による部会を核とし，農協の生活購買部門を独立させ地域生協を設立しその運営は婦人と青年が中心になるなど，後継者層にも活動の機会が広く与えられており，青年層の活動が活発であるという点でも道内でも代表的農村の一つとみられる。

また，このような中札内村の展開を浮き彫りにするために，稲作を主体としながらも，兼業への傾斜が進行しつつある空知管内の雨竜町を，同時に取り上げた。雨竜町は，同じく稲作地帯である近隣町村が，転作や米価引き下げへの対応として野菜など集約的な作物の導入が進んでいる中で，そうして動きに遅れを取った，停滞的な地域として位置づけられる。さらに，農村地

帯における価値観の現れ方を比較的にみるために，地方中核都市である帯広市の非農業勤労青年の意向についても取り上げた。

2．寒冷地畑作農村の青年の行動

1）日常的生活行動 ― 生活時間調査の分析

人々の行動は多様であるが，その中でイベントなどの，「動き」がある行動は捉えやすく，農村においても青年の行動はイベントの開催などが「村おこし」と結び付けられて注目されている。しかし，人々の行動は多様であり，農村の生活や文化環境と結び付けてその行動を理解しようとするとき，日常的な生活により即した，つまり「静」の行動を含めた捉え方が必要になってくる。

そこで，われわれは中札内村を対象として，青年の行動を２つの側面から分析することとした。一つは，北海道大学農業経営学教室が1987年10月から翌年10月まで取り組んだ生活時間調査結果に基づく日常的生活行動の分析であり，二つには，地域での行事や各種組織への参加状況に関する分析である。

まず，表１で年間を通じての生活時間構成をみると，20歳代の青年層の特

表１　年代別の年間生活時間構成

単位：時間

		必要時間			労働時間				社会文化時間		
		計	睡眠	身の回り	計	農業労働	農外労働	家事	計	社会	文化
男子	20 ～ 29	10.4	7.7	2.7	8.3	6.9	1.1	0.3	4.9	2.4	2.5
	30 ～ 39	11.4	8.4	3.0	9.9	8.3	0.4	1.2	3.5	1.2	2.3
	40 ～ 49	11.0	8.1	2.9	10.0	8.1	0.3	1.6	4.1	1.6	2.5
	50 ～ 59	11.2	8.2	3.0	8.9	7.3	0.1	1.5	4.7	1.5	3.2
	60 以 上	13.3	9.4	3.9	5.3	3.7	0.3	1.3	5.7	1.3	4.4
女子	20 ～ 29	10.9	7.9	3.0	9.5	3.1	2.2	4.2	3.3	0.6	2.7
	30 ～ 39	10.4	7.5	2.9	10.8	4.3	0.5	5.0	2.9	1.0	1.9
	40 ～ 49	10.5	7.8	2.7	10.0	6.4	0.1	3.5	3.6	1.0	2.6
	50 ～ 59	11.1	8.0	3.1	9.0	4.0	0.1	4.9	4.0	1.2	2.8
	60 以 上	12.6	9.2	3.4	6.5	1.4	0.2	4.9	4.8	1.1	3.7

注１）中札内村での生活時間調査による。
　２）この他，通学時間などがあり，合計は24時間にならない。

徴として指摘されるのは次の点である。男子では，まず睡眠時間が少なく，少ない睡眠で活動できるという肉体的特徴を示す。その逆に余暇時間を示す社会文化時間，中でも交際や行事参加などの社会的時間が他の年代に比べて極めて多い。また労働時間内容では，農外労働への就業時間が多くなっている。後2者の特徴は，そのほとんどが家族という限られた関係のなかでおこなわれるという農業労働の特質と対比させるならば，重要な意味を持つものであろう。つまり20歳代層は日常生活の中で，家族以外の多くの人々と接触しており，青年期のこうした行動がその後の社会活動の基盤を形成するものと理解される。

女子は男子とは違い，社会文化時間は他の年代層に比べ大きくはない。労働時間の内容では，男子よりも農外労働が多くなっている。これは，農家の青年女子の多くが自家農業ではなく農業以外の職業に従事していることを示し，男子同様，労働の場面では家庭外の多くの人々と接触をもっている。しかし余暇時間の使い方は，多くが家庭内にあるという特徴を持ち，社会的行動の領域が狭いことを示唆している。

ところで，農家・農村の生活は，農業生産の季節性に基づく季節的な変動を持っている。その変動は，冬季間の作物生育が不可能である寒地畑作ではさらに大きくなる。その変動を，冬季農閑期の2月，春の播種期の5月，秋の収穫期の10月の比較によってみると，年代別の特徴として以下の点が指摘される。

まず，家事労働が全労働時間の半分に及ぶ女子の季節的変動は男子よりも少ないが，男女ともに農閑期には労働時間の減少と社会文化時間の増加がみられることである。ところが，男子の20歳代は2月に大きな労働時間の減少がみられない。これは，さきにあげた農外労働がこの冬季に集中していることに起因している。女子では，30歳代層において，年間を通じて生活時間の変動が少ないものとなっているが，これは育児を主とする家事労働が大きな比率を占めるなど，むしろ年間を通じて社会文化的行動の時間がほとんど確保されていないという実状を反映したものといえよう。

2）地域的活動への参加形態

次に，地域的活動への参加がどのようになっているかを，地域行事と各種組織への参加状況によってみることとしよう。

地域社会には様々な組織が形成されており，それらの組織の活動は地域社会の活性度と密接に関連し，地域住民の生活環境の一つを形成している。特に，農村では集落や農協関係組織をはじめとする公的組織が幅広く組織化され，地域社会の中で重要な位置を占める。また，都市においてはカルチャースクールやイベントなどの商業サービスの形をとって供給される趣味や生活に関する文化活動は，農村においては，公共サービスもしくは，地域住民主体によるサークルなどや組織による行事・大会として提供されざるを得ず，そうした組織や行事への参加やその可能性は農村における生活の充実という面で重要である。

調査では，中札内村の各種団体（農協，商工会など）が全村民を対象として行っている11の行事と，教育委員会が主催している6つのスポーツ大会・教室を地域行事として取り上げ，それ以外の行事や行事を持たない組織への参加の状況を農家調査によって把握し，そこから青年の地域文化活動を捉えることにした。

まず，全村的行事・スポーツの参加回数について表2でみると，行事では後継者世代と経営主世代に行事の参加回数が多く，父母世代で少なくなっている。スポーツでは畑作は経営主世代と後継者世代の参加種目が多く，行事と共通する傾向を示し，経営主世代よりも後継者世代の種目数が多く，スポーツ参加が後継者世代の特徴を示すものとなっている。

次にその他の行事の参加について，まず表3は先に取り上げた行事・ス

表2　行事・スポーツ参加回数

		行事	スポーツ
男子	経営主世代	3.5	1.4
	父母世代	2.7	0.5
	後継者世代	3.5	1.8
女子	経営主世代	3.4	1.2
	父母世代	2.4	0.2
	後継者世代	4.0	1.5

注1）中札内村での農家調査による。
2）高校生以上についての集計。

表3　目的別組織への参加状況

		参加者率	文化	趣味	運動	生活
男子	経営主世代	38.9	−	2	7	2
	父母世代	20.0	1	1	−	−
	後継者世代	62.5	−	−	6	−
女子	経営主世代	55.6	−	−	4	9
	父母世代	30.0	3	−	2	−
	後継者世代	0.0	−	−	−	−

注1）中札内村での農家調査による。
2）参加者率は，目的別組織に一つ以上参加している人の割合。
3）実数は組織の参加人数である。

ポーツと集落の行事以外で参加した行事についてみると，参加者割合（その他の行事に一つでも参加したという人の割合）が示すように，これら行事の参加は男子，特に経営主が主体となっている。特に，泊まりがけ参加の「旅行」は女子には経営主世代にしかなく，農家の女子は村外に出る機会に乏しいということが知られる。その参加度の違いを主催団体と関連づけてみると，経営主の参加行事は「農業組織（農協部会など）」，「教育関係（PTA など）」，「生産組織」に集中し，経営主は家あるいは経営を代表しての公的行事に参加することが知られる。経営主の妻ではこれらの公的行事参加の他に，その他や農業組織の年齢・性別組織などのより個人的資格での行事参加が多く，後継者では年齢性別組織が大半を占めている。後継者では，年齢別組織が大半を占めその活動は村外の活動を中心としている。表4で，更に特に行事を持たず日常的な活動に中心をおいている目的別組織への参加をみると，経営主，父母世代と後継者の妻に参加者が少なく，経営主の妻と後継者に個人的資格による組織参加が多く，特に後継者の運動組織への参加が多く，先のスポーツ参加と同じ傾向を示している。

表4　その他の行事の参加内容と主催団体

単位：%，人

	参加者割合	行事				主催団体						
		旅行	研修	遊び	イベント	農業組織	年令・性別	行政	年令・性別	教育関係	生産組織	その他
経営主	61.1	5	3	5	2	5	—	—	—	5	4	2
経営主妻	55.6	6	5	5	2	4	2	1	—	5	3	5
父	30.0	4	—	1	—	3	—	—	—	—	1	—
母	10.0	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	—
後継者	37.5	2	2	—	2	2	—	—	4	—	—	—
後継者妻	16.6	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—

注）中札内村での農家調査による。

以上のように，中札内村の青年男子の行動の特徴として，社会的な組織活動に多くが参加し，行事やスポーツに積極的であるということが，日常生活行動，地域組織活動の両面から捉えられる。経営主が家や経営の代表として

行事に参加することと比較するならば，青年組織が社会的活動の大きな基盤になっているとみられる。その例として農協青年部の二つの行事への参画を挙げておこう。一つは毎年８月20日におこなう生協祭りである。これは先述した生協が主催するもので，主たる企画は婦人が中心となる仮装盆踊りと青年部のバザーである。もう一つは11月23日の収穫祭で，これは青年部が企画し屋内体育館での運動会と農産物や加工品の即売などを行っている。両行事とも村内の人々が生活の楽しみとして発案して始めたものであるが，ユニークな行事として近隣の町村からの参加も非常に多くなっている。

このように，青年男子は青年部などの組織で活動する場が与えられており，それが行動の活性化につながっているのである。この点では，女子は逆に村内での絶対数も少なく，そうした場が与えられていないという問題を抱えている。

３．農村における青年の意識

１）農業経営主の農業・農村観

農村の青年たちが主たる活動の場としている個々の農業経営や地域は，農家の経営主層の人々によって担われている部分が大きい。つまり青年層は，経営主層の価値観を色濃く反映した農業経営や地域の中で生活しているわけである。そこで，まず1990年に実施した中札内村での農家調査によって，経営主層の意識から分析していく。経営主層の意識は，青年層への影響を及ぼすものとしても意味があると同時に，経営主の年代によっても意識が変化している点に注目すると，それを反映する青年層の意識の特質を浮き彫りにする意味も持つ。

表５にみられるように，まず経営の方針として考えていることについては，規模拡大や野菜の導入，あるいは労働力の積極利用を図るなどといった積極策と，現状からの大きな変換は考えず経費削減や収量の増加などにに務めるという消極策に，大別される。積極策は40代前半までで比重が高く，消極策は40代後半以降で比重が高い。また，労働の配分に関する回答が多いが，これももっと積極的に利用したいという積極派と，労働配分を見直してゆとりを持ちたいというゆとり派とに大別できる。いずれも，所得獲得を通して，あるいは時間の配分という直接的な形で，生活に結び付いた問題として提起

表5 経営の方針　　単位：人

	20代	30代		40代		50代		60代
		前半	後半	前半	後半	前半	後半	
	1人	3人	4人	8人	5人	9人	2人	2人
規模拡大（面積・頭数）		1	1	1	2			
労力投下部門の工夫	1		1	2		1		
新規作物の導入・拡大		1		3	1	1		
販路の工夫				2		2		
土づくり			2	1		3		
品質の向上				1	1			
労力配分の是正	1	1				2	1	
増収			1	1	1	3		
経費の節減	1	1			2	3	1	
現状維持			1	1				
負債の償還				1			1	
規模縮小・資産処分							1	2

注1）中札内村での農家調査による。
　2）以下いずれも面接による自由記述式の回答を整理したものである。

されている。ここでも40代前半までが積極派に，40代後半以降がゆとり派に対応している。

次に，生活環境についての意識を表6にみると，農村における自然環境に関する回答が多く示されている。

農業という職業についての意識を表7からみると，全般に自由であることよさが回答されている。しかし，その自由の中身については，50代以上が「好きなようにやれる」「人に使われることがない」といった社会的な束縛のなさであるのに対して，40代以下では時間的なものが多くなっていることが特徴である。時間的自由の意識は労働力の積極利用を考える発想にもつながる。こうしてみると，農業という職業の特徴と，農村という生活環境の特徴は切り離しがたく結びついていて，年代を問わず落ちついた環境の中での束縛の少ない生活に農村のよさを見い出しているように受け取れる。これは経営に関する回答での厳しい現状認識とはずれがあるように感じられる。しかし，30代前半以下に「農業には魅力がある」「スリルがある」といった，より積極的な回答がみられることに注目するなら，若い経営主層には“自由さ”が

表6　農村のよいところ・わるいところ

年齢	よいところ	わるいところ
34	気楽に生活できる	
40	静か	つきあいが多く周りを気にする
42	広々としたところで生活できる	仲間がやめて去ってゆくのが寂しい
42	環境がきれい	
50	空気がきれいで公害の心配もない	レジャー施設がない
52	道がよい	
	地元に職場がある	
53	道がすいている	
	騒音がない	
	自然が豊か	
54		人を呼べるほどの環境整備ができていない

注）中札内村での農家調査による。

表7　農業のよいところ・わるいところ

年齢	よいところ	わるいところ
28	スリルがあって面白い	
34	魅力がある	天候に左右され易い
40	人に束縛を受けない	
	時間を自由に使える	
41	自分で作ったものを安心して食べれる	家をあけておくと鶏が全滅してしまう
42	気楽で思うとおりにできる	疲労が激しい割に見返りがない
43	自由である	冬に働けない
43	休みたいときに休めて気楽	何事も自分で責任を負わねばならない
	作物を育てる喜びがある	
44	やってきたことに誇りがもてる	
46	自由があり社長のようにできる	先行投資が天候に左右されるのが不安
50	時間に自由に好きなようにやれる	一か月ぐらいの休みがとりたい
51	好きなことをやって食べてこれた	
51		採算のあう農業は困難
54	自由で人に使われない	
56		自由に作物が作れない
		経済的に不安定
61	自由である	
	努力の見返りがはっきりしている	
65	時間的余裕がある	

注）中札内村での農家調査による。

より積極的に可能性として認識されて，積極的な経営方針となって現れていると見ることができる。

2）農村における青年の職業観・生活環境観

ここでは，農村の青年の意識の特徴を，農村の中でも農家と非農家での違い，専業畑作地帯である中札内と兼業稲作地帯である雨竜との違い，さらに地方都市の帯広における非農家との対比，あるいは現在農業後継者としての専門教育を受けている農業大学校生の意向との対比，を通してみていく。中札内村と雨竜町における意向調査の対象は，農協青年部，農協および役場の30才未満の職員，さらに商工会青年部のメンバーとした。また，帯広における調査対象者は30才未満のスポーツ施設の利用者を対象として行った。

農業に対する職業観および生活環境に対する意識に関する調査結果は以下のとおりである。

表8によれば，現在の職業に対する満足度は，中札内の農家が「十分満足」「まあ満足」の割合が高いのに対して，雨竜の農家は「やや不満」「大いに不満」が半数を占める。非農家の場合「どちらともいえない」に集中するか「まあ満足」「やや不満」に分散する形となっている。農業大学校生は非農家に近い形となっている。

表8　現在の職業への満足度

単位：%

	中札内農家	中札内非農家	帯広非農家	雨竜非農家	雨竜農家	農業大学校
十分満足	33.3	10.5	4.8	5.0	0.0	0.0
まあ満足	33.3	21.1	38.0	25.0	30.0	25.0
どちらともいえない	0.0	47.4	23.8	60.0	20.0	50.0
やや不満	33.3	15.8	33.3	10.0	30.0	20.0
大いに不満	0.0	5.3	0.0	0.0	20.0	5.0

注1）いずれも配表方式のアンケートの回答を集計したもの。
2）割合は無回答・無効回答も含めて計算している。
3）重複回答は回答者実人数で除している。
4）回答者は中札内農家6人，非農家19人。帯広21人。雨竜農家10人，非農家20人。農業大学校20人。

では，この様な満足度や不満はどういったところからくるものなのであろうか。現在の職業について魅力の魅力を表9に，いやなところを表10に整理した。魅力に感じる点は，どちらの農家も「やりがいがある」「努力が報わ

表 9　現在の職業の魅力

単位：%

	中札内農家	中札内非農家	帯広非農家	雨竜非農家	雨竜農家	農業大学校
魅力を感じない	0.0	5.3	23.8	0.0	0.0	30.0
やりがいがある	83.3	21.1	19.0	20.0	60.0	45.0
自分の考えが反映される	66.7	15.8	14.3	10.0	90.0	30.0
努力が報われる	50.0	5.3	0.0	15.0	50.0	25.0
自分の特性が活かせる	16.7	15.8	14.3	20.0	30.0	25.0
仲間が楽しい	33.3	47.4	14.3	35.0	30.0	15.0
仕事が楽しい	0.0	15.8	23.8	0.0	0.0	15.0
仕事が楽である	0.0	15.8	23.8	25.0	10.0	5.0
社会的意義を感じる	16.7	10.5	14.3	15.0	10.0	10.0
イメージがよい	0.0	21.1	19.0	20.0	0.0	0.0
社会的評価が高い	0.0	15.8	0.0	15.0	0.0	0.0
収入や地位が安定している	0.0	36.8	19.0	50.0	0.0	5.0
収入がよい	0.0	10.5	19.0	0.0	0.0	5.0
その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

注）表8に同じ。

表10　現在の職業のいやなところ

単位：%

	中札内農家	中札内非農家	帯広非農家	雨竜非農家	雨竜農家	農業大学校
いやなところはない	0.0	26.3	14.3	10.0	0.0	15.0
やりがいを感じない	16.7	15.8	23.8	20.0	0.0	10.0
自分の考えが反映されない	0.0	10.5	14.3	25.0	10.0	0.0
努力が報われない	16.7	15.8	19.0	20.0	50.0	10.0
自分にむいていない	16.7	10.5	23.8	25.0	0.0	10.0
仲間とうまくいっていない	0.0	0.0	4.8	10.0	0.0	0.0
仕事がつまらない	0.0	10.5	19.0	15.0	10.0	15.0
仕事がきつい	0.0	5.3	28.6	15.0	10.0	45.0
社会的意義を感じない	0.0	10.5	9.5	0.0	0.0	5.0
イメージが悪い	33.3	10.5	9.5	5.0	50.0	55.0
社会的評価が低い	50.0	10.5	4.8	5.0	40.0	25.0
収入や地位が不安定である	50.0	10.5	4.8	0.0	50.0	15.0
収入が悪い	66.7	36.8	28.6	40.0	70.0	10.0
その他	0.0	10.5	9.5	5.0	0.0	0.0

注）表8に同じ。

れる」「自分の考えが反映される」が半数を超える高い回答率を示しており，非農家との大きな違いとなっている。逆に農家で嫌なところとして回答の多

い「収入や身分が不安定」「社会的評価が低い」「イメージが悪い」は，非農家では回答の非常に少ない項目である。農家の中でも雨竜では「努力が報われない」が嫌なところとして50％を占めていて，魅力での「努力が報われる」の50％と二分した形になっていることが，特徴的である。

非農家は魅力，嫌なところとも回答が分散している。その中で，魅力としては農村部では「収入や地位が安定している」「仲間が楽しい」，帯広では「仕事が楽」「仕事が楽しい」といった回答が相対的に高い割合を占めている。帯広で，「魅力を感じない」が最も割合の高い回答であることは，大きな特徴である。嫌なところとしては，「やりがいを感じない」「自分の考えが反映されない」「自分に向いていない」といった回答の多いことが農家との違いである。

農業大学校生は，農家に近い形であるものの，「魅力を感じない」も割合が高く，中間的な性格を持っている。

生活環境に対する意識については，まず表11に生活環境として重視するものの順位付けを見てみた。全体に「環境」「生活の利便性」が上位にランクされ，「歴史・風土」が最下位にランクされることが共通している。また，農家では他に比べて「地域の活力」「住んでいる人」が上位にランクされ「公共の機能」のランク付けが非農家に比べて低く，帯広では他の地域に比べて「文化的な環境」が相対的に高い位置にあることがみてとれる。

表11　住みたいと思う条件の順位づけ

	中札内 農　家	中札内 非農家	帯　広 非農家	雨　竜 非農家	雨　竜 農　家
環境	1	2	1	2	1
生活の利便性	3	1	2	1	2
公供の機能	5	3	3	3	5
地域の活力	2	4	5	4	3
住んでいる人	3	5	6	5	3
文化的な環境	5	6	4	6	6
歴史・風土	7	7	7	7	7

注1）表8と同じアンケートによる。
　2）回答者の回答順位によってウエイトをつけ，その平均を比較した順位である。

次に，現在住んでいるところに対する評価を表12からみていく。環境についてはほとんどが「よい」に最も多く回答しているが，中札内の農家だけは「普通」が最も多い。歴史・風土，公共の機能，住んでいる人については共通して「普通」に対する回答が最も多い。地域の活力は，雨竜の農家と非農家，中札内の農家では「悪い」が最も多いが，中札内の非農家は帯広と同じく「普通」が最も多い。文化的な環境については中札内では農家・非農家とも，雨竜では農家で「悪い」が最も多いが，雨竜の非農家は帯広と同じく「普通」が最も多い。生活の利便性については，農家では「普通」に集中しているのに対して，非農家では「悪い」の割合が比較的高くなっているが，帯広では「よい」の割合が最も高い。

表12　現在住んでいるところの評価

単位：%

		中札内 農　家	中札内 非農家	帯　広 非農家	雨　竜 非農家	雨　竜 農　家
環境	良い	16.7	42.1	33.3	30.0	20.0
	普通	33.3	26.3	23.8	5.0	10.0
	悪い	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0
生活の利便性	良い	0.0	0.0	23.8	10.0	0.0
	普通	50.0	42.1	14.3	20.0	40.0
	悪い	0.0	26.3	19.0	10.0	0.0
公共の機能	良い	0.0	10.5	9.5	5.0	0.0
	普通	33.3	26.8	33.3	30.0	40.0
	悪い	16.7	21.1	9.5	5.0	0.0
地域の活力	良い	0.0	10.5	14.3	5.0	0.0
	普通	16.7	42.1	38.0	5.0	10.0
	悪い	33.3	15.8	4.8	25.0	30.0
住んでいる人	良い	0.0	15.8	19.0	5.0	0.0
	普通	33.3	52.6	38.0	25.0	40.0
	悪い	16.7	0.0	0.0	5.0	0.0
文化的な環境	良い	0.0	5.3	4.8	5.0	0.0
	普通	16.7	31.6	47.6	25.0	20.0
	悪い	33.3	31.6	4.8	5.0	20.0
歴史・風土	良い	0.0	10.5	4.8	5.0	0.0
	普通	50.0	52.6	52.4	20.0	30.0
	悪い	0.0	5.3	0.0	10.0	10.0

注）表8に同じ。

農家においては「地域の活力」が重視されていながら，「悪い」とする評価の多いことに，危機意識が感じられる。また農村部では，同じようにランクづけが低いものの，「歴史・風土」の評価が「普通」に集中している一方，「文化的環境」の評価に「悪い」が多いのは，潜在的な欲求の現れではないかとみられる。

4．社会環境と青年の意識

1）職業選択と職業観

ここでは，先にみた職業観・生活環境観の形成される背景を探ってゆく。まず，職業観の背景として職業選択の経緯を，表13から職業選択に当たっての態度，表14から現在の職業を考え始めた時期，表15から職業選択の要因，の3点によって探ってゆく。

農家に共通していることは，「小さい頃から親しん」だり「周囲の人がやっているのを見」ながら「親しい仲間がやっている」ことにも影響されて，「自ら進んで」「中学在学中」以前に職業選択を行うという態度の多いことである。

非農家は，農村部では考え始めた時期が「高校在学中」に集中しているのに対し，学歴との関連も大きいと考えられるが，帯広では「高校卒業時」以降が大半を占めている。職業選択の要因としても，農村部では帯広に較べて「親の勧め」や「地元にいながらできるので」の回答率が高くなっている。非農家に共通しているのは「他に適当なのがなかった」が高い回答率を示し，農家で回答率の高かった3項目への回答率が殆どないことである。

また雨竜では，職業選択の要因として農家・非農家とも「地元にいながらできるので」が高い回答率を示していることと，非農家で「親の勧め」が特に高い回答率を示していることが特徴的である。

表13　現在の職業につくにあたっての態度

単位：%

	中札内農家	中札内非農家	帯広非農家	雨竜非農家	雨竜農家	農業大学校
自ら進んで	100.0	52.6	47.6	40.0	70.0	50.0
なんとなく	0.0	26.3	28.6	35.0	10.0	45.0
仕方なく	0.0	10.5	19.0	10.0	20.0	5.0
その他	0.0	5.3	4.8	15.0	0.0	0.0

注）表8に同じ

表14　現在の職業への就職を考え始めた時期

単位：%

	中札内農家	中札内非農家	帯広非農家	雨竜非農家	雨竜農家	農業大学校
子供の頃から	16.7	5.3	9.5	0.0	20.0	10.0
中学在学中	33.3	0.0	4.8	5.0	20.0	20.0
中学卒業時	0.0	0.0	0.0	5.0	20.0	0.0
高校在学中	33.3	52.6	9.5	40.0	30.0	40.0
高校卒業時	0.0	10.5	19.0	25.0	0.0	15.0
大学在学中	16.7	5.3	9.5	15.0	0.0	15.0
大学卒業時	0.0	5.3	19.0	0.0	0.0	0.0
転職に際して	0.0	21.1	28.6	10.0	10.0	0.0

注）表8に同じ。

表15　現在の職業を考えるようになった要因

単位：%

	中札内農家	中札内非農家	帯広非農家	雨竜非農家	雨竜農家	農業大学校
小さい頃から親しんでいた	83.3	10.5	14.3	5.0	80.0	50.0
親の勧め	33.3	42.1	33.3	85.0	40.0	50.0
周囲の人がやっているのを見て	33.3	5.3	4.8	5.0	30.0	20.0
地元にいながらできるので	16.7	42.1	28.6	70.0	60.0	35.0
自分で集めた情報	50.0	47.4	19.0	20.0	0.0	15.0
周囲の人の勧め	33.3	47.4	38.0	40.0	10.0	10.0
親しい仲間がやっていた	33.3	0.0	4.8	0.0	20.0	10.0
マスコミの影響	0.0	0.0	4.8	0.0	0.0	0.0
住みたかったところで働ける	16.7	0.0	23.8	20.0	10.0	30.0
他に適当なのがなかった	0.0	42.1	33.3	35.0	10.0	35.0
その他	0.0	10.5	14.3	10.0	10.0	20.0

注）表8に同じ。

では，職業選択に際して，現在の職業にどんなことを期待していたかを表16から見てみると，農家の場合「やりがいがある」「自分の考えが反映される」が圧倒的に多いが，非農家では共通して「収入や地位が安定している」が最も回答数の多い項目となっている。いずれも現在魅力として感じていることとしても多く回答されていた項目である。ただ，非農家でも「やりがい」という項目は期待として回答数の多い項目であるが，それは必ずしも現在の魅力としての回答とは一致していない。これは，職業選択に際して収入といった客観的な要因については事前に評価できるが，「やりがい」などの主観的

表16　就職に当たって現在の職業に持っていたイメージ

単位：%

	中札内農家	中札内非農家	帯広非農家	雨竜非農家	雨竜農家	農業大学校
自分の考えが反映される	100.0	26.3	19.0	5.0	100.0	35.0
やりがいがある	66.7	31.6	28.6	30.0	80.0	70.0
自分の特性が活かせる	33.3	21.1	33.3	15.0	60.0	35.0
努力が報われる	83.3	5.3	4.8	10.0	20.0	35.0
仕事が楽しい	0.0	10.5	4.8	5.0	20.0	10.0
仕事が楽である	0.0	15.8	14.3	20.0	20.0	0.0
社会的意義がある	0.0	15.8	14.3	20.0	0.0	25.0
イメージがよい	0.0	21.1	19.0	30.0	0.0	10.0
社会的評価が高い	0.0	21.1	4.8	25.0	0.0	5.0
収入がよい	16.7	21.1	33.3	20.0	0.0	15.0
地位や収入が安定している	0.0	53.2	33.3	55.0	0.0	25.0
その他	0.0	10.5	4.8	5.0	0.0	0.0

注）表8に同じ

な要因についてはやってみないと分からない点が多いということを現しているとみられる。それに対して農家にとっての農業のように事前に身近に接することができるような職業であれば，主観的な評価がなされてそれがそのまま魅力となりうることが示されている。こうしたことがあって，早い時期に自ら進んで職業として農業を選択し，やりがいを感じるようになっていくのだと考えられる。しかし一方，雨竜の非農家には農家出身者，それも長男が多く，それが同じ環境の中にいながら「親の勧め」がとりわけ大きな要因となって，都市部に比べれば比較的早い時期に就職を考え始めていることは，とりわけ人的環境の及ぼす影響の大きいことを示している。と同時に，こうした「親の勧め」が生じて来る，あるいは大きく影響する背後に，経済的環境の違いのあることを考えなければならない。これは，同じように農業を選択しながら雨竜の農家が中札内の農家とは対象的に「収入や地位の不安定」から農業への不満が強いことにもうかがえる。

2）居住地の選択と意識

次に生活環境観の形成過程を，同じようにそこに住むようになった経過から探ってみる。表17にみられるように，そこに住んでいる理由は，いずれにおいても「職業選択の都合」と「仕事上の都合」の，職業上の理由で半数近

表17　いま住んでいる市町村にずっと住んでいる，あるいは選択した理由

単位：%

	中札内農家	中札内非農家	帯広非農家	雨竜非農家	雨竜農家
職業選択の都合	50.0	42.1	28.6	25.0	40.0
仕事上の都合	33.3	31.6	19.0	30.0	40.0
愛着がある	50.0	36.8	42.9	40.0	40.0
住んでいて住み易い	33.3	21.1	42.9	15.0	30.0
親の面倒を見なければならない	16.7	31.6	19.0	20.0	70.0
いま住んでいるところに住みたかった	16.7	21.1	23.8	10.0	30.0
なんとなく	0.0	0.0	0.0	35.0	30.0
親元にいると安心	16.7	31.6	19.0	10.0	10.0
親元を離れたかった	0.0	10.5	4.8	5.0	0.0
以前住んでいたところが嫌いだった	0.0	5.3	4.8	0.0	0.0
移るには不安がある	0.0	5.3	0.0	0.0	0.0
その他	0.0	5.3	23.8	5.0	0.0

注）表8に同じ。

く以上を占めている。雨竜の農家の場合，職業選択の要因でも地元志向の強い回答が大半を占めていたので，職業優先の考えと居住地優先の考えが混然となっているが，「親の面倒を見なければならない」という回答がとび抜けて高い回答率になっていることからすると，消極的な居住地優先といえるかも知れない。雨竜の非農家では，居住地優先の回答が若干職業優先の回答を上回っている。しかしながら，雨竜では農家・非農家ともに他では回答のない「なんとなく」への回答が30%を超えていることから，積極的な居住地優先ではないことがうかがえる。中札内では，職業選択の要因と見比べた場合，農家・非農家とも職業優先の回答が居住地優先の回答を上回っている。帯広では，両者が半数近くできっこうしている。

以上のことから考察すると，都市部の青年では居住地の選択なり職業の選択なりが比較的自由になされているとみられる。中札内では，農業においても非農業においても，積極性のいかんに関わらず職業選択が居住地選択よりも強く意識されている様子がうかがえる。対して雨竜では，居住地選択，それもどちらかというと消極的な地元志向から職業の選択が行われている様子がうかがえる。こうした違いが特に農家の場合に現在の職業に対する満足度の違いに結び付いていることも考えられる。いずれにしても農村部では，積

極的ではない居住地選択が，生活環境の各項目で「悪い」とする評価の多いことに結び付いているとみられる。

5．結　　論

以上，青年の行動と価値観を主として寒冷地畑作地帯である中札内村の青年を中心にみてきた。その結果，青年の特徴として捉えられたのは以下の諸点である。

第1に，青年の行動として組織参加を通じた活発な社会活動とスポーツへの参加があげられる。しかし，農村の中で絶対数の少ない女子の社会活動の参加機会は男子に比べて乏しく，社会的行動が少なくなっている。第2に，農村青年は全般に，積極的には農業あるいは農村に存在する職業を選択した結果，消極的には「親の面倒をみる」という消極的な選択の結果，農村に現住しており，農村に住むこと自体を積極的に志向しているわけではない。第3に，しかし，生活環境に対する価値観は，農村・地方都市双方で「環境」と「生活の利便性」が上位にランクされ，地域的な生活環境への関心は高くなっている。この他，農家では「地域の活力」・「住んでいる人」が上位にランクされているが，これは青年がとっている行動に合致するものであろう。地方都市ではランクづけが高い「文化的な環境」への志向が相対的に低いことは，「地域の活力」による独自の生活文化創造の志向とみることもできよう。

農業青年の農業に対する価値観の形成に絞ってみると，周囲で農業が営まれている環境の中で身近に農業という職業に接しながら成長し，農業という職業に自己実現の喜びを見いだして積極的に，しかも早い時期に自分の職業として農業を選択していることが指摘される。しかしながら，実際にやってみると収入やイメージの面で不満がでてくる。ただし，自己実現の喜びがそうした不満に勝る場合には，その選択に満足するという結果に結びつくことが，中札内の農業青年を雨竜町の農業青年や非農家と比べたときに指摘できる。

しかしながら，「努力が報われない」といったより厳しい経済環境にあるなかでは，収入やイメージの面での不満が農業に対する不満としてそのまま表に出てくる。雨竜の農業青年にはそれが色濃く現れていた。こうした不満は，「親の面倒を見なければならない」といった回答に代表される消極的な

地元指向からの職業選択とも結びついていた。さらに，こうした不満が巡りめぐって，同じように農家に育ち農業に接しながらも，親を初めとする周囲の勧めが農業へ向かわせず，しかしながら地元を離れられないという消極的な職業選択が行われていると考えられる。このような状況の中で農業の魅力として出てくる「自分の考えが反映される」や「自分の特性が活かせる」といった回答は，自己実現というよりは，束縛のなさに向けられたものと解釈すべきであろう。

このように，社会環境の違いが若い農業者の意識の面に強い作用をおよぼしているばかりでなく，農業の担い手の存在状況そのものとも深い関連のあることがわかった。社会環境の中でもとりわけ経済的条件は担い手の存在状況に強く作用するものであるが，逆に担い手の活動が経済的条件の変革に反作用として働くことを忘れてはならない。この点に，農業に携わる各層の担い手に地域農業・地域活動への参加の機会を積極的に設けている中札内村での成果が位置づけられるであろう。

また，経済的条件の作用も，親を初めとする周囲の人的環境を通じて担い手へと伝わる部分の大きいことを考えるなら，その作用がどういう経路でどのように担い手におよぼされるかが解明されたときに，経済的条件に反作用を及ぼしていくような担い手の育成に大きな貢献をなしうる。

本稿における当初の問題意識にたち帰れば，こうした担い手の経済的条件への働きかけの局面こそ，農業経営学が研究の対象とすべき主体分析上の重要な側面である。これらは重要な課題であるが，ここではそこまで踏み込めなかった。今後に残された大きな課題である。

付記）　本稿は，総合研究開発機構・特定課題研究助成「若者の意識・行動と地域活性化」の一環である「北海道の農村における若者の行動と価値観」のなかで，北大・黒河功助教授および酪農総研・松木靖研究員を中心として行った調査をもとにしたものである。アンケートの実施に当って，中札内村においては役場・中川博氏，農協・江崎克美氏，北海道畑作経営技術研究所・新村捷策氏，商工会議所・高嶋重信氏，農協青年部・浅井明博氏，また雨竜町においては役場・水沢隆氏，さらに北海道農業大学校・岡田直樹氏，十勝農協連・鱈場尊氏，帯広市役所の松浦勝範氏より大きなご便宜を戴いた。ま

たアンケート調査においては総勢200人におよぶ多くの方々のご協力を頂いた。記してここに謝意を表する。